

藤浪博士の略歴

加藤一夫^{*1}. 藤浪剛一追悼録(藤浪和子編, 1943)より

はしがき

内ヶ崎作三郎^{*2}さんが英國ケンブリッヂ大学から帰つて、東京芝のユニテリアン教会に牧師となった頃、私は少時、そのお仕事を扶けさせてもらったことがある。

ユニテリアン^{*3}はキリスト教の一派ではあるが、キリスト教側ではこれをキリスト教と認めたがらない程だから、内ヶ崎さんがこの教会の牧師となったとは云え、少しも牧師臭くはなく、日曜の説教などにも、極めて自由に、政治を論じ、経済を語り、社会情勢を批判すると云つた有様だった。ところが、それが却って、普通の教會に嫌らぬもの、特に若い青年や学生の要求にかなつたと云う形で会堂はいつもそれ等の人で一杯になる位であった。

此の教会の幹部と云つたものには一高教授の三並良、慶應教授の向軍治、評論家の山路愛山をはじめ、もし若いところでは、今岡信一良、相原一郎介、内藤濯、吉田絃次郎、鈴木文治等があつて、謂はゞ多士済々であった。そしてそのうちには、教会にはついぞ顔を見せたことはなかったが今こゝに此の思い出の綴られているわが藤浪博士もあつた。

内ヶ崎さんは或日、私に云つた。

「君、藤浪君を訪ねて見てくれ給へ。藤浪君も我が教會員の一人なんだ」

このとき初めて私は、藤浪さんが今、順天堂医員の一人で、独逸留学から帰つたばかりのレントゲンの先駆者であるのを知つた。

藤浪さんはその頃、神田の或旅館に止宿していたが、まだ独身であった。内ヶ崎さんに云われたので、私はやがて藤浪さんを訪ねたが、私たちは勿論、宗教を語り合うようなことはなかつた。私はたゞ、藤浪さんは非常に物やさしい親切な、そして謙遜な方だと云う印象をうけたことを覚えてゐる。そして此の印象は、藤浪さんの全生涯を通じて変わらないものであつた。

この時以来ずっと、私達の交際はつゞけられた。私の結婚のときには、その頃すでに、物集博士の令嬢たる奥さんを迎えていた藤浪さん夫婦に仲人になつて頂いた位である。私はたゞその後社会運動なんかしたため、御迷惑をかけては済まないと思つて、わざと余り親しくしない様に心がけていた。が、それにも拘らず、私たちは常に藤浪さん夫婦の御好意をうけて居た。ことに私が、社会運動から足を洗つて生活をきりかえるために非常な窮乏に陥つたときなどは、私の子供の教育費を出して下さつたりなどした。

これは實に、深く膽に銘じたことである。

それで、今度、藤浪さんが亡くなられると直ぐ私の頭に浮んで来たことはせめてもの御恩報じに、藤浪さんの伝記を書いて、その美わしい人格廣く世に伝え、死んでも生きた藤浪さんをながく世に止めたいと云うことであった。ところが、何と云つても今、日本は戦時体制下に在つて本にする紙さえも容易に手に這入らない状態であるのに悩んでいたが、幸いこゝに藤浪さんの友人や知己により思い出が編まれることになったので、その想い出のはじめに伝記を書くことを奥さんから依頼された。

私の喜びは大きい。

勿論、これは伝記と云つても、ほんのその一端を綴るにすぎない略伝のようなものである。ことに多忙のうちに急いで筆をとらねばならぬのであるから、満足なものが出来る筈はない。私の恐れることは、私がこれを書くことによって反対して、藤浪さんの美わしい人格を穢してしまうのではないかと云うことである。このことは先づ藤浪さんの靈に対し奥さまに対し、友人に對し、門下の諸君に対して、深くおわびをしなければならぬ。私としては、たゞ、私の最初の願いの一端がこれによつて実現されたことを喜び、全力をそゝいで、これを仕上げようと思うのみである。

*1 加藤一夫 (1887-1951). 明治学院神学部卒。詩人、評論家、大正デモクラシーを背景とする民衆芸術運動家。1918年春秋社の創設に参画。トルストイの影響を受け、初期はアナキズムを唱えて検挙されるなどしたが、その後転向して農本主義、天皇信仰に傾斜した。1916年、結婚に際して藤浪夫妻が媒酌人をつとめ、藤浪は以後生涯にわたって加藤を後援した。長男哲太郎(後に日C級戦犯として服役、手記「私は員になりたい」を出版)の慶應義塾大学経済学部入学に際しては保証人となって学費を提供し、加藤の困窮時にはその生活も支援した。[小松隆二. 土の叫び地の囁き－加藤一夫の生涯と思想. 三田学会雑誌 8:416-34, 1985]

*2 内ヶ崎作三郎 (1877-1947). 東京帝国大学英文科卒、英國オックスフォード大学に留学(本稿ではケンブリッジ大学とされているが誤記と思われる)。早稲田大学教授、ユニテリアン牧師を経て、1924年衆議院議員に当選、以後立憲民政党幹部として要職を歴任。1937年第一次近衛内閣政務次官。

*3 ユニテリアン主義 Unitarianism. アリウス派に分類されるキリスト教の一派。三位一体、キリストの神性を否定し、キリスト教主流派からは異端とされる。イギリスで1769年に創始、日本には1880年頃から布教され、福沢諭吉も一時これを支持した。現在は同仁キリスト教会がこの流れを汲む。藤浪はこの会員であったが、教会に顔を見せる事は無く、その後キリスト教と積極的に関わったという記録もない。おそらく、本文中にあるように中学時代に下宿して世話をなつた三並良がその幹部であったことから、誘われて入会したのではないかと思われる。

修学時代

明治十三年六月七日、名古屋市東區久屋町に徳川御三家の一である尾張侯の侍医であった由緒正しい藤浪家の四男として生れた少年藤浪さんは明治二十年、即ち七歳のとき、愛知県立師範学校の附属小学校に入学した。

この頃はもう、日本歴史を憂変革せしめた明治維新の大業も次第に整備し、教育の設備も全く面目を新たにしていたので、幼心の藤浪さんにも此のことがはっきりと意識されて居た。朗らかな明るい心をもって、少年藤浪さんは此の新しい学校に入学し、常に快活な喜びのうちにすくすくと成長して行った。

小学校を終える中学校である。明治二十六年の四月にはもう、彼は、県立第一中学校の生徒であった。

庭園にある花樹は、都会に生れた少年の心を、その昔人類の家であった自然に結びつけるのには充分であった。この家の庭に在る果樹もまた少年の原始的な胃の腑に喜びを与うるとともに、純真な心を喜ばせるものであった。

明治二十九年、県立第一中学校の四年を終了して東都に上るまでの四年間、中学生としての少年藤浪さんは、こうした最初の印象から逃れることなく、学業の合間に家に居る書生と共に果樹の世話をしたり、日曜などには郊外に出て、植物の採集をすることを楽しみとした。

後年藤浪さんが、科学者にして而も単なる科学者ではなく、情操豊かなる自然の愛好者たりしことは恐らく、天性の然らしめたところではあるが、同時にまた、少時の斯うした環境によることも大であったのは想像に難くはない。

この間、藤浪さんは、たゞ、本にばかり囁りついたり、植物を採取して自然を楽しんだりするばかりでなく、身体の鍛錬に意を用い、中にも今までの日本には行わぬかった野球を特に喜んだ。蓋し、これは彼が言に身体をばかり強くすればよいと云ったような無趣味な性格ではなく、常に新しいものに憧れ、新しい世界を開拓して行こうとする進取的な気性が如何に強かつたかを證するものである。

少年時代に於ける彼の特色はしかし、これに尽きるのではない。或はこれは雨親の思いやりによったのかも知れないが、中学生にしてすでに、藤浪さんは書や画を学んでいた。思うに、中学の課程に励み、運動に熱中し自然に親んで植物の採集までやっていた中学生としては、こんな事にまで力をのばすのは容易のことではない。而も、今も大体そうであるが、この頃の学生は一般に西洋かぶれをしていたために、英語や科学には熱中はしても、日本古来の書道や画道などは十把一からげに無視した時である。こう云う時代、こう云う

年頃に於て、特に書道や画道に親しんだと云うことは特筆すべき事実と云わねばならぬ。

藤浪さんは中学時代に於てこれを修めた。彼が後年、単なる科学者ではなく、眞に立派な人格者としての学者となり教育者となったのは實に中学時代に於ける此の修養に負うところ大であったのは云うまでもない。因みに藤浪さんの教をうけた書家は鈴木眞庵氏であり、書は鈴木不知氏に就いて学んだのである。

県立第一中学を出ると藤浪さんは東京に上り、独逸協会学校に入學し、當時この学校に教鞭をとつて居た三並良氏^{*4}の家庭に厄介になる事となった。

独逸協会は独逸自由派基督教の学校で、中学部と専門部とがあった。普通の中学校ではすべて英語を正科として教えたが、この学校のみは独逸語を教えたところに此学校の特色があった。専門部もまた、独逸流の哲学や神学を主とするものであつただけに、一部の人には注目され且つ重んぜられていた。

藤浪さんがこゝで独逸語を学んだことは勿論であるが、同時に、三並さんの訓陶の下に在つて自由基督教の感化をうけた。後に彼がウィーンに学んだのも遠因はこゝに在つたかも知れないし、ユニテリアン教会の会員となったのも、三並さんとの関係によるものであった。また、藤浪さんがカチカチのクリスチャンとならず、自由なる学徒として眞理を探求する様になったのも、この学校及び三並さんの影響によるものと云うべきであろう。

藤浪さんの天性、青少年時代の自然の感化、そして此の学校及び三並さんの家庭の環境。これ等の條件の下に、もし自然の発達に任かしておいたならば、藤浪さんは恐らく、もつと別な方向に進んでおったことであろう。しかしそれよりももっと大きな運命の決定力は藤浪さんの家が代々医家であったと云うことであった。彼が明治三十四年、此の独逸協会学校を出ると直ぐ、その翌年岡山の医学専門学校に入學したのもその為である。これによって兎も角藤浪さんの一生涯の進路が、はっきりと定まったと云つてよい。

岡山の書学専門学校は勿論、他の医学専門学校同様に、貴際的な刀圭家を養成するのが目的で、学者をつくることを主眼とはしていなかった。藤浪さんはしかし、別に期するところがあるかのように、コツコツと勉強して、成績もまた抜群であった。かくて明治三十九年、岡山医学専門学校を卒業してもなお同校の病理学教室に止まって、病理学を研究した。しかし此教室はなお藤浪さんの大志を遂ぐるには充分でなかった。そこで、一年の後再び東京にのぼり、東京帝国大学医科大学皮

*4 三並良（みなみ はじめ、1865-1940）。新教神学校卒。ユニテリアン教会牧師。ドイツ語学者。慶應義塾、陸軍幼年学校、独逸協会学校、第一高等学校で教鞭をとり、1919年松山高等学校ドイツ語教授。

膚科の介補となり、皮膚科の権威土肥博士の下にあって、その指導をうけた。

土肥博士も既に他界された今、藤浪さんがその頃、学問的に何う云う功績を挙げていたかを知るよしもないが、博士夫人の眼に映じた藤浪さんは、その若さにも拘らす世にも稀な温厚篤実な紳士であった。中にも、午下な少年少女のよき友として保護者として、よくやりよく世話する青年紳士であった。

だが、これも亦、藤浪さんの最後の落着きどころではなかった。そこで明治四十二年、即ち藤浪さんの三十歳のとき、医学研究のために欧羅巴に渡った。

欧羅巴に渡った藤浪さんは、オーストリア国、ウィーン大学附属病院のレントゲン学教室に於ては、主任ホルツクネヒト氏について、光線療学室に於ては、主任ラング氏について、ポリクリニツク・レントゲン教室に於ては、主任キーンベック氏についてレントゲン治療、光線療法等を研究した。

もっともこれは必ずしも藤浪さんを洋行させた父の希望ではなかった。父としては、充分の研究と実地の経験を得て帰って来た藤浪さんを、年老いた自分の後嗣として、名古屋で開業せしめたかったのである。

藤浪さんとしては、直接治療に当り、病魔に冒されて不幸な人を救うと云うことには、人並みすぐれた使命感を感じては居たが、それよりも更に強い願望は、医学の未開拓地を開拓することであった。そしてそれには実に、まだやっと生い立ったばかりのレントゲンを研究をして、それを完全に医学療法に応用せんことであった。

レントゲンの研究はまことに、一面藤浪さんの好学的 requirement を充すものであり、他面藤浪さんの博愛的欲求を実現せしむるものであった。藤浪さんはこのことを、父にも兄にも書き送って、その同意を求めた。京都帝大の教授である兄の鑑氏には勿論不同意であるべき筈はなかった。父としても亦、藤浪さんがレントゲン専門と云ったような看板をかけて名古屋で開業するにはまだ時期早尚であり、従って折角の家門を継がせるわけには行かないとは考えたが、愛息の此の健気な志望を挫く気にはなれなかった。のみならず、考え方によつては、これは、人の不幸を救おうとする神聖なる家業を廃すことではなく、寧ろ、その発展と解すべきものである—何となればこれは新しい時代の知識と技能とをもつて新しい時代の治療に従事することだから……とも云えるであろう。

かくて藤浪さんは、安心してこの新しい学問と技術との研究をつづけることが出来たのである。

ウィーン滞在中、藤浪さんは、^{ただ}啻に研究に於て愉快であったばかりでなく、生活に於てもまた甚だ愉快であった。藤浪さんはこゝで、欧羅巴留学の多くの日本人は

勿論、多くの漫遊者たちにも接した。そして、土地不馴れな人々を案内したり、知名の士に紹介したりした。そしてそれば實に人に親切をつくしたいと云

う彼の天性に適う楽しい仕事の一つであった。

藤浪さんは決して、たゞ研究すればよいと云うような、謂ゆる学究ではなかった。滞在中彼は多くの知名の士を訪問し、また、歴史的に有名なる地や、名勝の地を探ることを楽しみとした。而もそれはたゞ、物好きにそうするのではなく、婦朝後の語草にしようとする洩墓な考えからでもなかった。彼の生活はそのまゝ研究であった。……たゞ医学上の研究のみならず、歴史のことについても、世情人心についても、社会情勢についても、すべては皆、藤浪さんの研究の対象であった。

ウィーンに於けるレントゲン研究を終って帰朝したのは、明治四十五年一月であった。

レントゲンについては理論的には既に知られて居たとは云へ、これを治療の実際にあてはめることはまだ日本には行われていなかった。ところが藤浪さんは今、これを理論的にも実際的にも研究して帰った日本最初のレントゲンの権威であった。

帰ると早々、順天堂病院から招聘せられ、同年四月、順天堂病院のレントゲン科長に任せられた。斯界に於ける藤浪さんの権威が次第に知れ渡るにつれ、治療を受けようとする病者は日々に多くなった。

設備のために忙しかった藤浪さんはやがて治療のためにも忙しくなった。しかし藤浪さんは頑健そのものであるかの如く、疲れを知らなかった。彼は真剣であった。彼は誠実であった。診断や治療に従事して居る間、彼は実に戦場の勇士の如くであった。綿密であり、几帳面であり、如何なることも忽にしない彼の前にあつては、如何に親しい者と難も、如何に優れた助手と雖も、その些細な過失や不注意を許されなかつた。かくして人々は皆藤浪さんの前にピリピリして居た。しかし仕事を終えるや否や藤浪さんは全く別人の如く、やさしい、親切な男であった。助手に対して、学生に対して、患者に対して、これは實に藤浪さんの一生涯を通じての態度であった。そしてそれ故にこそ藤浪さんは、人々から無上の尊敬と信頼を払われたのであった。

大正四年の二月に藤浪さんは医学博士の学位を授けられた。それはこの忙しい間に提出した論文によるものであったが、提出された主論文は「空虚なる胃中に於て分泌を診定する簡易なるレントゲン検査法」と云うのであり、参考論文としては、

1. 胃の幽門痙攣、分泌過剰及運動障礙について
2. 胃の運動力に関する参考試験について
3. 抗酸性にして視られ得べき丸子のレヨンチェン検査に於ける価値、並に、グルトイド囊及ケロドラート囊の用途について

4. フインゼン燈を喉頭狼瘡の治療に応用する一新法について
5. 佝僂病に於ける腕骨の化骨について
6. 腕骨の化骨について

等で、何れも皆、独文で書かれたものであった。

この頃、慶應義塾は完全なる総合大学たらんがために医学部を増設しようとしていた。そして医学部を新鮮なものとせんがために当時まだ何処の大学にも完全な教室をもって居なかつたレントゲン科をおくこととし、その創設を藤浪さんに托した。

藤浪さんはこれを快く受けた。と云うよりは、さながら自らの仕事であるかの如き熱情をもつて、此の大学に理学的診療科を設置するために努力した。藤浪さんが此科の主任教授となつたのは云うまでもないが、医学部教授として慶應の医学部増設のために奔走したのは忘れることが出来ない。

学校に於ては藤浪さんは厳格なる父の如くであり、慈愛あふるゝ母のようでもあった。病院に於ては責任を重んじ親切な刀圭家として、患者の信頼を博した。藤浪さんの部屋は常にキッチンと整頓せられ、居心地のよい天国であった。

この時以来死に至るまで、こゝが藤浪さんの職場であったが、藤浪さんは決して、大学の間を一步も離れない窮屈な学者ではなかった。大学に於てはよき教授であり、病院に於てよき先生であると共に、家庭に於てはよき夫であり、社会に於てはよき指導者であった。そして至るところに、その鮮な足跡を残した。これ等のことについては別に章を改めて述べることとするが、略歴としてこゝに是非記録しておかなければならぬことは、この間に藤浪さんが、多くの書を著し、多くの学会を創設し、または多くの学会や協会に關係し、世道人心を裨益する事が實に多かったのである。

今その重なるものを挙ぐれば

大正十二年には日本レントゲン学会を同志と共に創設し、その幹事に選ばれた。

昭和二年には富士川博士を中心として日本医史学会が創立されたが、その理事に推された。

昭和五年には日本温泉協会が設立され、その理事となつた。

日本レントゲン学会は昭和八年の六月に分裂し、その分派は日本放射線医学会と称したが、藤浪さんはその放射線医学会の幹事に選ばれた。

昭和十年には日本温泉氣候学会と云うのが創立されたが、同会の理事となつた。

昭和十二年の四月にはオーストリアのレントゲン学会からその名誉会員に推された。

昭和十五年には、さきに分れた日本レントゲン学会と日本放射線医学会が合併して日本医学放射線学会となつたが、同会の幹事に推された。

昭和十六年には、さきに創立した日本医史学会がその創立者たる富士川博士を失つたので、その後任として理事長に推された。

また、同年、日本温泉科学々会が創立されたが、同会の副会長に推された。

これによつて見ても、藤浪さんが如何に日本のレントゲン学の発達のために尽し、如何に多くの貢献を遺されたかを知ることが出来るが、こゝに注意すべきは、右の足跡に見ても、啻にレントゲンのためのみでなく、温泉学のために、また、医史学のために、尽されたと云うことがわかる。而もこれは、単なる余業や余技としてではなく、その精根をさゝげた程の事業であったのである。

しかし藤浪さんの仕事はこれでつきのではない。彼は更に、名墓顕彰会の幹事として、故人の業蹟や徳をたゞえる事に努力し、夫人と共に、ひまあるごとに諸方を巡つて埋もれた墓をおこし、「掃苔」と云う雑誌まで出し、杉山検校遺徳顕彰会には、呉秀三博士の後をつがれてその会長となられたが、どれも亦、偉大なる足跡をのこした故人の徳を顕彰すると共に、日本的なものを保護しようと云う志からであることは勿論である。

人の品格はその事業によって判断することが出来る。随分大きな足跡を遺して行った人はある。我々はしかし必ずしもそれ等の人を尊敬しない。何故なら、たといその足跡は偉大であっても、それは必ずしも品格を備えたものとは云われないからである。ところがわが藤浪さんのごときは、世間に目だつ偉大なる仕事には興味がなかった。藤浪さんの熱情を沸かしたもののは、たといそれが偉大なる事ではなくても、それが、人の為になる事であればよいのであった。

そしてこゝに、藤浪さんの優れた品格がある。

人としての藤浪さん

藤浪さんの伝を書くに當り、先づ第一に頭に浮んで来るのは、その人としての性格である。何となれば我々は、斯くも円満なる人格を、滅多に他に見出しえないからである。

円満と云つても、普通に考えられて居るように只だ活達自在と云つたようなものでない。こう云うことにおける欠陥があるが、こう云うことには非常に発達して居ると云つたようなそんな偏狭さが少しもなく、人間として斯くあるべきだと云う性格が円満に満遍なく発達して居ると云つた意味に於てのことである。

中にも最も顧著な藤浪さんの性格は「まこと」と云う

ことである。実際、藤浪さんの一生は徹頭徹尾「まこと」をもって貫いて居たと云つてもよい。その一つの例として私は、彼が岡山の医学校に居た頃のことを挙げることが出来る。

岡山医学専門学校に共に学んだ山口政一氏は藤浪さんについてこんな思い出を書いている。

「昔日を忍んで遡る四十余年、雛鳳の搖籃岡山の医学舎、紅顔の新人生、後日の大博士、東都独逸協会の出身、吾人また中学に独逸語を兼修せる三年の上級生として共に当時独語の権威高橋金一郎教授指導独語特別班列席の知已たり。又所属の教会をも同じくして、若さ日の親交愈々厚きを加えたれば、予の所持するところの学用骨格貸与の関係ありしが、進級に従い不要に帰せしに、その骨格返附に際し、中指と示指の末節二個紛失の弁疏に加えて必ず補填の策を講ぜんことを誓約せられたれば、平素の心安さに今は予も不要のもの故、その配慮の要なきを答えしに、若き同窓、肅然容を改むるところありて曰く「骨の所有者にはかくとも済むべけんも、此骨の主たりし人に対するとき、只二節の骨片紛失と雖も礼を失すこと甚だし。これを放置すること愈々申証なき事なれば誓って搜索原状に復さん」とする旨堅く言明せられ、これを聞くもの頓かに襟を正して感激久しかりし一場は、奔放自由の年少気鋭の学生時代にありては世に稀有なる光景にして、後年の真摯なる埋骨の処、掃苔観念の淵源するところ、誠に深厚なるものあるに思い到らざるを得ざるなり」

「持主にとてはもうなくともよいだろう。だがこの骨の主であった人には済まない。これを放っておくと云うようなことはその人に当して礼を失するも甚しい」。こう云ったデリケートな心持は誰にもあるだろうか。特に、山口氏も云っているように、これを云つた人は、まだ年歯も行かぬ一青年にすぎない。そのような青年の誰が一礼、こうも真摯に考えらるゝであろうか。物の問題ではない。金銭の問題ではない。大きな精神的な問題である。藤浪さんは實に、その青年の頃すでに、こう云うことに気がついた程、まことの人であったのである。

そして此の心がけは決して、一生失われはしなかった。否その生涯を通じて、この本性は一層磨きをかけられ、凡ゆることに顕われている。後年、レントゲンの研究に於て骨の発育とレントゲンの関係や手足の骨の発生など、骨に関する多くの業績を遺したごときも、学生時代に於ける此の事件が因をなして居たとも云えるであろう。また、既に死んで居る人にもなお斯くのごとく敬虔であったと云うことはやがて、医家先哲の徳を慕って、多大の費用と時間とをも惜まず、その肖像を集めて本としたり、埋もれ廃れた墓を興すと共に、それによって故人の徳を顕わそうとしたりして、いろいろの事業をされたものとも云われるであろうと思われる。

藤浪さんの名墓顕彰は決して、趣味や好事からではなかった。無論この種の人によつて多く行われる骨董趣味からやつたのではなかつた。それはたゞ、埋もれた人の徳や功績を掘り起そうとするまことの産物であった。

藤浪さんに接した誰もが感ずることは、彼が何時もニコニコして居り、なごやかであり、親切であることであつた。「掃苔」の「藤浪剛一博士追悼録」で誰であつたか、聖徳太子は和を以て尊しと云われたが、藤浪先生はそれを御自分の生活に於いて示されたと云つたようなことを云つて居たと思うが、まことにその通りで、藤浪さんはまさに大和の人であった。

藤浪さんはどんな人にも親切であり、どんな人をも尊重し、どんな人からもその長所美所を掘り出そうとした。それは、斯くの如くしなければならぬと云つたような義務からするのではなく、もとより、こゝろにもない附焼刃的なものでもなかつた。すべてはみな、そうしないでは居られない、彼のまことから出て来るものであった。

と云つて、これは決して、無智な母親がその子に対するような馬鹿可愛がりようでもなかつた。善いことは善いとし悪いことは悪いとして、決して物を忽にしない。学生や助手が藤浪さんを恐い先生として尊敬したのは、こう云つたことのためである。

物を忽にしないと云うことはやがて几帳面と云うことにもなる。あの忙しさのうちに在つてもなお、家も研究室もあの様に整頓していたのは、藤浪さんの几帳面さのためである。

その忙はしさのうちになお、几帳面に手紙を書き、几帳面に人を訪問する。而もその手紙は簡単ではあるが卒直で飾気がなく、ぞんざいな字などは決して書かない。月々損をして出して居る「掃苔」の原稿を頼めば、必ずその稿料を送つて勞に酬いることを忘れない。雑誌発行の期日を正確にするためには、印刷屋が恐れをなすほどにも催促をする。

これ等はすべて、そのまことから出ることであつて、も頭、私利私慾から出るのではない。随分いろいろの会に關係し、いろいろの会合に出て世話を焼いたが、その会を利用して、自分の名をあげようとな自分の利益をあげようとするようなことは絶対になかつた。大東亜戦争が始まってから此の方、滅私奉公と云つたような様語が盛んに用いられ、事実、日本精神はこの滅私奉公であるが、藤浪さんの一生は全くこれであった。

尾佐竹猛氏は、その思い出のうちに、

「藤浪さんの人格についてはそれぞれの方からお話をあろうと存じますが私の感じました一面は、種々の学会に關係なされ、あらゆる出費を為されたにも拘らず、決して表面に名を出そうとなされなかつた奥床しさであります。世には兎角、名前を出したがつたり、中に

はわざわざ自分の苗字を研究所や学会等の名に冠したがるかの如きは、私の唾棄するところです。それからまた、僅かの金を出して、自分が表面に立ち、その浅薄なる趣味や知識を押し売りしたがる人間も多いのであります。此種の人間は私は蛇蝎視覗しているのであります。然るに藤浪さんは全くこれと正反対の人格を有して居られたのには、私の傾倒を禁ずる能はなかつたのであります……」

と語って居られるが、これは尾佐竹氏それ自身の人格の奥底しさを示すものであると共に、よく藤浪さんを洞観されたものと云つてよい。

会があつて、その会の中心となつて居ながら、藤浪さんは決して傲慢と構えるようなことはなかつた。さながらその会の小使かなんかのように、まめまめしく立ち働いて世話をしたのみならず、集つて来た人の特徴や長所を見ぬいて、それを發揮せしむる機会を与えることに努力した。これは、啻に自分を表わそうとしなかつたばかりでなく、他人を持ち上げようとする人の大きさを示すものである。

斯くの如く、藤浪さんは、如何なる場合、如何なる処に於ても、全く己と云うものがなかつた。藤浪さんの生涯にとつては、滅私と云う言葉ほど適切な表現は見出されないと私は思う。

藤浪さんと難も時々人を批評したり社会を批評することがあった。そしてそれは、大概の場合、正鵠を失して居なかつた。しかし、こゝに注意すべきは、それは決して人や物を傷つけんがためではなかつた。多くの場合それは、罪のない評言であるか、そうでなくともその批評さるゝものを育てんがためであった。

私は藤浪さんの斯うした一面を見るとき直ちに、黒住宗忠⁵のことを思い出す。黒住宗忠と云う人は黒住教の開祖であるのは誰も知っているが、彼の眞の偉大さはまだ充分に認識されているとは云われない。しかし私の見るところでは、彼は啻に、日本の宗教的偉人であるばかりでなく、世界の宗教家のうちで、否、基督や釋迦でさえ、彼に及ぶものは一人もないと思う位である。

この宗忠は決して怒らなかつた。或るとき酒に酔つて狂乱した武士が岡山城下で二十人もの人を斬り殺して居るところに出くわして「場所からで御座るぞ」と大喝一声し、そのためにその狂武士の乱暴は止んだと云うことであるが、これは怒ったと云うのではなく、寧ろ、その士を罪より救つてやろうと云う天の声であつた。宗忠は常に、怒つてはならない。怒ると云うことには私情がある。その私情はまた相手の私情をいやが上に募らせるばかりであつて何の益にもならぬのみか、大きな禍となる。それよりも人の長所を見出すことである。人の悪いことを見出しても、その人のうちにあ

る善いところ、即ちその人の神を、引き出してやる態度に出なければならぬ、と云つたようなことをもつて人をさとしていた。そしてこれは實に、藤浪さんの日常の態度であった。

家庭人としての藤浪さん

「私は一ぺんでもいゝから藤浪博士の怒った顔を見たいと念願したが、どうとう御生存中見ることは出来なかつた。甚だ残念に思つて居ます。掃蕩会の総会のあつたとき、陳列中の独逸の掃蕩に関する雑誌が一冊だけ紛失して、その犯人は判つていますが、現場を見ていないので困つてしまつたとき、少々語氣に強きところが現われたので、この時は怒つてくれるかなど楽しみにしていましたが、到頭ものになりませんでした。藤浪博士は怒つたことのない人か奥さんにお聞きして見たいと思って居ましたがその機会を得ませんでした。こんどお目にかかるときお聞かせ下さい」

宮尾しげを氏はその追憶記の冒頭でこう云つて居る。ところが私はかゝつて藤浪さんの怒つているのを見たことがある。が、厳密に云つてそれは怒つたのではない。随分語氣を烈しくして、助手を叱つて居たのであるが、叱ると云うことは必ずしも怒るのではない。もつとも多くの人のうちには、叱るのではなく怒るのだと云うのが適當なやり方をするのが多いのであるが、藤浪さんの場合は前節に云つた黒住宗忠のように、そのうちに私情を挟んで怒るのでなく相手のうちから善いものを引き出すために叱るのである。もつと詳しく云ふと、藤浪さんはたゞ凡てのことに責任を重んじ、助手や看護婦がそれをなおざりにすることを責めたのである。而もそれは助手や看護婦にもその同じ責任感をもたせるためであったのである。して見ると、私もやはり、藤浪さんの怒つた顔を見たことがないのである。

ことに私は、家庭に於て藤浪さんの怒つているのを見たことがない。家庭の内部のことがわかるほど私は、藤浪さんの家庭に出入したことがないのだから、これは寧ろ当然なことであるかも知れない。私はしかし確信をもつて云うことが出来る。「藤浪さんはその生涯を通じて、家庭に於て怒つたことはない」と。

蓋しこれを云うのは、藤浪さんの家庭が理想的に大和の世界であったからである。

藤浪さんは、謂ゆるフェミニストではなかつたが、夫人を尊重した。夫人はまた、妻と云うものは夫の奴隸たるべきものだなどとは毛頭考えて居ないが、夫を尊重した。かくてこの家庭には、互に信頼し合う独立の夫があり妻があつたのである。

*5 黒住宗忠(1780-1850)。神道黒住教の開祖。黒住教は、天理教、金光教と共に幕末三大新宗教の1つとされる。天照大神を最高神とする。

学校や社会に在って多忙な夫は、家庭に帰って文字どおり憩いのオアシスを見出した。何故なれば、こゝに来ると、夫の仕事を理解し、心からそれを扶けようとする夫人があったからである。客が来るとそれを心から歓待する夫人があったからである。本を読んだり、研究に没頭すると、それを心から労わる夫人があったからである。

夫人が凡てのことに気をつけて藤浪さんの仕事を扶けたのは云うまでもないが、中にも、藤浪さんが名墓顕彰会の幹事として又会長として、故人の徳を顕彰し、「掃苔」と云う雑誌をまで発行するや、夫人は藤浪さんと一緒に理もれた墓を探しに出かけたり「掃苔」の編集を手伝ったりしたことなど有名で、会の人々から非常な感謝をさゝげられているのは周知のことである。

もとよりこれは夫人の賢明によるものではあるが、同時に夫人をして斯くの如き内助を敢えてせしむるには、夫たる藤浪さんの徳があったからであるのを忘れてはならない。藤浪さんは家庭人としてもまた理想的であったのである。

教育者としての藤浪さん

藤浪教授が亡くなられてから間もなく、慶應義塾大学医学部で、慶應義塾大学としての追悼会が行われた。

通悼会には、未亡人をはじめ、大学教授、学生その他の会場がぎつしり一ぱいにつまり、簡素な式場には故人の笑みを含んだ写真が飾られて居た。追悼会がいつも厳粛にこゝで行われたのである。

私もこの追悼会に臨んだ一人であるが、何よりも私を喜ばせたことは、この会が何等儀礼的なものではなく、眞に故人を悼む表情に溢れて居たことである。

藤浪教授は勿論慶應に医学部が増設された時からの教授で、謂はゞその生みの親のようなものである。だが、この追悼会はたゞ、そうした関係から、儀礼的に行われたものでないことは、当日こゝで、藤浪教授について語った人々の真剣な態度からも、その話の内容からもはっきりと読み取ることが出来る。

学校関係の人々からは、慶應に医学部設置の当初から藤浪教授が此の医学部のために如何に骨を折られたかを感謝された。教授たちからは彼の学的業績が報告せられ、病気の経過及び解剖によって得られた諸々の症状が詳しく発表された。しかし中でも最も私を感動せしめたものは、故教授の門下生や学生たちの切々たる追悼の辞だった。

何となれば、これによって私は、門下生や学生たちが、教授の死を如何に大なる損失として居るか、如何に深き悲しみのうちに浸って居るかを眼のあたり見ることが出来たと共に、教育者としての藤浪教授の一面を遺憾なく看取することが出来たからである。

これ等の人々の話をきいて居る間に私の感じたことは、藤浪教授は決して知識の伝達をもって、その天職の凡てとすることなく、同時に、と云うよりはそれ以上に人格の養成に力を注いだのだと云うことである。

門下生や学生たちの言明するところから察すると、藤浪教授は一面、実に厳格であると共に他面、実に愛情に充ちた親切な教育者であった。この二つの面は、一見相反する性格であるかのようであって実は全く一致する性格の反映であることは云うまでもない。

私は嘗て藤浪さんが、診断中一助手に厳格であるのを見たことは前にも云った。これはしかし助手に対してだけではなく、学生に対しても同様であった。

たとえば、学生がやって来なければならぬことをやつて来ないときには非常にやかましかった。レントゲン写真が一回で通過すると云うようなことも滅多になかった。二度、ことによると三度もやりかえて、やつと通過すると云うようなことも珍しくはなかった。勿論これは、患者に対する責任感や親切心の表われであるのは云うまでもないが、学生や助手にもその同じ考をもたせ、同じ習慣をつけさせるためであった。

こう云うことは、助手や学生以外、卷間藤浪さんに接する人には決してなかった。だから人は多く、藤浪さんのこうした一面を見のがしている。掃苔の「藤浪剛一博士追悼録」中にも、玉林晴朗氏は「いつも私の御目にかゝった博士はニコニコとせられていた。そして穏和な態度で懐しく色々と話をされたので、つい良い気になってしまい……慶應の医科を出た義弟に「学校に於ける藤浪博士は随分と厳格であって、学生の間では大変にコワイ先生として定評がある」と云う話をきいて、はじめてその一面を識った」と云うようなことを書かれているが、さもあるべしと思われる。

しかしながら、それは勿論一面である。藤浪教授はまた、此の上もなく親切な善い先生であった。教授の訓陶をうけた北里文太郎氏の追悼文を読んで見ても、容易にそれがわかる。

文中には現に博士の教授をうけて居る令弟からの手紙も採録されて居るが、これによって見ても、この二人が藤浪さんに如何に愛されて来たか、早く父を失った二人が、藤浪教授を父の如く慕っている真情がまざまざと描き出されている。

この追悼文を読んで感ずることは、教授の教育は啻にその教室に於て行われるばかりでなく、教室の外に於ても行われたと云うことである。北里氏はよく家庭に教授を訪問したらしいが、家庭に於ける教授夫妻は実に親切であった。こまごま注意を与へたのは勿論であるが、このほかにも教授は、家庭に来る学生に貴重な本を貸し与えたり、文献をしらべる時の注意やその方法を教えたりした。こう云うことは、教室で知識の切

売りをしている人には到底あり得ない親切であると思はれる。

子供を愛し、よく育てる。これが彼の楽しみでもあり、教育的本性でもあった。追悼録や追悼の辞にはこのことにはあまり触れてないようだが、藤浪さんが富裕でない友人の子供のために尽したことは少くない。或者には学資を与え或者には書籍を与え、或者には家庭で歓待した。

このことが余り語られなかったのは、教授がこうしたことを行なうことを他人に知られることを好まなかったからである。人の上に立ったり、己を表わすことを好まなかった藤浪教授の斯うした隠れた善行は特筆大書すべきである。

レントゲン研究の先駆者

藤浪さんの仕事のうち、何と云っても最も大きなのは、多くの医家に先駆してレントゲンを研究し、これを病気の診断治療に役立たせたことである。

藤浪さんがウィーンに留学した頃、レントゲンの学理的研究は無論あったが、これを治療に応用すると云うことは、未だ多くの人の注意を惹いて居なかつた。しかし、藤浪さんは医学上レントゲンの齋す功果の偉大なるべきことを直感した。そこで、欧洲にもまだ余りわれていなかつたレントゲンの医学的研究をはじめた。

何ごとによらず、人に先駆して新しい途を切りひらいて行くと云うことは、中々容易なことではなく、危険ですらもあることは、誰しも知っている。殊に藤浪さんにとっては、日本に帰れば父祖の開拓して呉れた大きな地盤がある。が藤浪さんは此の平坦な道を歩もうとはせず、海のものとも山のものともわからぬ此の新路の開拓を選んだ。こゝに我等は生活の安易を求むる単なる医師としてでなく、科学者としての藤浪剛一を見る。

実際、日本の医界に理学的療法を創始し、普及せしめた者は我が藤浪さんである。それ故に、このことは何と云っても、藤浪さんの仕事のうちでも最も大きなものであると云わねばならぬ。順天堂に於て実際の治療に従事し、慶應の医学部に於て此の講座を受持たれたほかに、藤浪さんは更に、著書に於てその普及をはかられた。

今その重なる著書を拾って見ると次のようなものがある。

歯科レントゲン学
れんとげん治療学
内臓れんとげん診断学
レントゲン写真図譜
れんとげん学
ラヂウム治療法
光と生物
紫外線療法

医史学の研究者として

科学者としての藤浪さんはレントゲン研究に尽きるのではない。藤浪さんの興味は更に祖国日本に結びついている。中にも医史学に於ける功績はその最たるものであろう。

医史学は元来富士川游博士の創意に基くものであるが、藤浪さんはその最初からの協力者であり医史学会の創立せらるゝや、その理事に推された。

医史学などと云うと、徒らなる古医書の蒐集を目的とする道楽のように思われ勝ちであるが、実は我国将来の医学の上に重要な意義を持つものである。世に温故知新という言葉があるが、医史学も即ち其の學問であつて、現代のわが医学の発達に寄与した先賢の苦心努力の跡をたずねる事によって現在の医学を検討し反省し、これによって将来への正しき方向を定めんとするものに外ならぬ。

この頃、わが国の医政上に於て医道昂揚が殊に叫ばれつゝあるがこれは西洋医学を輸入するに急であったわが明治以来の風潮が余りに物質的な形を取りて発達した現代の医学上の病弊を、それ以前のわが先賢の行蔵によって反省し、西洋医学の持つ弱点を除去し、東西の美点を一括した日本医学を建設せんとする其の理想的の一つの現われであるが、医史学はその目的を即ちこゝに有するのである。

藤浪さんの古書蒐集は實に、此の研究の為めであるが、従つてそれには常に熱情的なものがあった。このためには如何なる労苦をも、如何なる出費をも厭わなかつたが、多忙な藤浪さんはわざわざ自分で出かけて行って、多くの時間や金銭を費さなくとも自然と集つて来るようになっていた。有名な古書店に連絡をとっているのは勿論であるが、持って来た本が案外無価値なものであつても、また、既に買取つてあるものであつても、決してこれを断ることがなく、而も先方の云いなりに高価をも辞せずこれを買取つた。藤浪さんのところに沢山の本が集つて来たのはこのためであると云つても敢えて過言でないであろう。

序でだから云つておくが、こんなに熱情をこめて輯めた本であるにも拘らず、これを見たいと云う人には心おきなくこれを貸与したと云うことである。池上幸二郎氏の思い出にこんなことがある。

「初めて先生に御目にかゝった折私は深く、先生の人格に打たれたことがあり、今に忘れ得ぬ一事がある。それは私が初めて修理すべき書物を受取りに御自宅に伺つて預り證を差出そうとしたところ「そんな物は君いらないよ、君を信用しているからね」と云つておられたことである。蔵書家が自らの蔵書が大切であればある程、その蔵書を人に預ける時に、證文を渡さずして品物を渡して呉れる人は十人に一人もない。況や初

対面の人をやである。私はこの一事は未だに忘れない。その時私は、先生所蔵の貴重本の数々を拝見した。書物を購入する上の種々の珍談をもおきゝした。同じ本の前半を或る本屋が持つて来て、数日たつてその後半を全く関係のない本屋が持つて来て、こゝに完本になつた或る貴重本の話などは實に面白かった」

これは本の修理をする人の話であるが、こう云うこととは、読みたいと云う誰にでも度々やつたことである。

医史学研究の産物として、藤浪さんには「日本衛生史」や「東西沐浴史話」の著があるが、なお、日本の科学史に関する一大著述を計画し、そのためには一切を擲つ決心を示された位であった。然るに未だそれに着手しないうちに亡くなられたことは惜しい。

医家先哲肖像集

医家先哲肖像集は医史学研究の一剖産物であると云うことは、藤浪さんが此本の序文に斯う書いていることによってもわかる。

「医家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、画像を展べて自ら像前に酒瓶を供え、少年の自分にも共に礼拝せしめられたことを覚えている。そして、その時は何時も祖父の師に当る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た関係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあったのである。この家例の裡に育つた為か、自分は何となく画像に対してこよなき尊重愛惜の情念を持つことゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機縁を釀成したのである。大正の大火灾に遭った自分は、蒐集品を悉く失ったが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに一百六十余種の画像を蔵するに至った。之を纏めて刊行したものが、この医家先哲肖像集の一編である。

大正の火災に遭った自分の辛い経験から、失われ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思い立ちながら、荏苒歳月が徒らに経過するのみで、遂に今日に及んだのであった。……しかし、それ等は到底容易に蒐め得るものではない。偶々その人に擬すべき肖像を発見することもあるが、それが果して信すべきものかの真否の鑑識は洵に覚束ないのである。又、名門の遠裔にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝医道から観て大切な先哲の肖像若干を収め得ることは恰も歯の抜けたようなものであるが、されば、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの医家先哲肖像集一編を刊し、若し他日機あれば拾遺の編を出す可なりとし、一先づ茲にこれを上版することにしたのである。」

即ち藤浪さんのこの仕事は、藤浪さんの家に於ける幼年時代からの感化によるものであり、関東大震災前既にかなり多くの肖像が集められていたことがわかるのである。

藤浪さんの此の仕事は医史学的立場からなされたものであることは、同じ序文に、

「我が国には古くから画像を家に伝える慣わせがあり、医家に於ても同じく寿像を作ったものが相当に多いのであった。医家は一つには社会的位置が比較的良かった為め、又他には生活も豊かであったことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかつた訳である。

乃ち医家にあっては、随分世代に亘って描かしめた肖像が伝っているのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携えて家に帰り、その家に伝えると云うようなこともあるから、医を業とするものゝ多いだけ、他に比すれば医伯の像は世間に流布したものも稍々多いのであった。然し「石碑不及口碑存」^{*6} 底の高踏主義から、画像などに無頓着であった名家もある。例えば蘭医の大家桂川甫筑の一家、又は奈須玄壺、坪井誠軒などが画像を遺さなかつたことは周く知られている所である。さりながら、後世から云えば医史考證の上から、又尊崇の情を満たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。随つて到底それに接し得ざるものがあれば、学界にとっての憾事の極みである」

とあるによつてもわかる。

まことに藤浪さんも云つているように、日本の医学は、奈良朝の僧医時代から出發して、藤原平安時代の呪術治療、鎌倉時代の民間療法を経て、天正慶長時代の漢方医学、江戸時代の蘭方、明治時代の洋方と、次第に進歩発達して、今日では決して泰西諸國の下に置かるゝものでないまでになっているが、医学をして斯くも進歩せしめたものは實にその間に輩出した医聖先哲の力である。今日我が医学が泰西諸國と比肩して毫も學術的進歩に劣らざるものは畢竟先哲の学問が捨石となり、その苦心が遺伝したからである。藤浪さんが、医家先哲肖像集を編み、加うるに一々その小伝を付した意味はこゝに在るのである。

「茲にそれ等を思い廻らせば、先哲の鴻大なる学恩に對して、限りなき敬慕の情に堪え難いのである」といい、なお「先哲の伝記を繙き、或は名家の遺墨を親るときはその風格、その人の雅趣、そら人の氣品を懷い、愛慕尊崇の念そぞろに禁じ難きを覚えるのである。しかしこれだけでは、まだその人物の全貌を窺知するに足りないのを遺憾とする。しかも、若しそこにその人物の影像があつて、親しく之れに對うことゝなれば、また格別の感情が新たに湧き來つて、眞にその人に接するが如き思いあらしめるのである。而して、嘗てその人の行状記から想像した面影は、写真によれば案外の風姿であったことに驚くこともあり、或は軽洒脱の筆

*6 石碑は口碑に及ばずして存す。石に刻まれた記録よりも、伝承のほうが長く存続するの意

蹟から考えた先哲は意わぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰うこともある。おもうに、行状記、筆蹟などから、その人の風^{おも}を偲ぶは、恰も煙雨の懸った山容を見るが如く、罩^{ぼう}露^{とうろ}一たび晴れて、山景の真を現わせば、峯嶺更に別様の觀あって、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき伝記は、未だ真にその人の人格風姿の全貌を伝えざる低調の非難を免れがたいのである。」

と云っているが、これが藤浪さんの肖像画に対する所懐である。藤浪さんは即ち故人を偲び、故人の徳を讃うるためには何うしても、その人の肖像によって、さながらその人に接するが如きものがなければならぬと云う考を持っているのである。

こゝに於いても亦、我等は、藤浪さんのまことを看取ることが出来る。藤浪さんのこれをなした理由は、単に医史学的に先人の業蹟を見るばかりでなく、一つには自分自身、先人の徳を偲ぶためでもあり、それよりも大きな動機は、かくする事によって先哲の正しき姿を伝えんがためであったのである。

而もなお我々の忘れる事の出来ないのは、この肖像を集むるために藤浪さんは凡ゆる努力を惜まなかつたと云うことであり、本にするときには一々これを自分の信頼する人をわずらわして写真にとらしめた程の熱情をもって居たことである。

杉山検校顕彰会

藤浪さんが名墓顕彰会や杉山検校顕彰会のために尽したのは、医家先哲肖像集を編まれた気持ちと一連の思想的関係を持つ。否、と云うよりは、全く同じ考えの別の現われでもある。

先づ杉山検校遺徳顕彰会について云うならば、やゝもすれば按摩や針の先達と軽く見らるゝ杉山検校の功績や徳を顕彰して再認せしめんがためであったと共に、今日やゝもすれば甚だ軽視されている按摩や針はその実、日本本独特的、日本医学の重要な一部門を占むるものであることを世人に知らしめんためであった。

前にも云ったように、藤浪さんは西洋医学をおさめ、特に西洋医学の最先端を行くレントゲンの医学的研究に従事したにも拘らず、決してまた、日本在来の医学を軽んずるものではなかった。随つて漢方医学や日本医学の復興に努めている多くの人々の崇敬措く能わざるものでもあった。

勿論藤浪さんは、たとい如何に日本医学や漢方医学の長所を認めていたとは云え、そのため西洋医学を無視するような偏狭には陥らなかった。

吾所主張亦活物窮理。尚軒岐而未必盡信其書。惡蠻貊而未盡排共衛。博採諸五大洲中。日試月驗一次歸于活人。即是神州之医道耳。⁷

と云った本間玄調⁸のこゝろは即ち藤浪さん的心で、あつた。玄調について藤浪さんは云っている。

「玄調は実験科学者であり、自説の主張者でもあつたが又、愛國者でもあつた。一世の大家たりし彼の学識思想は尚、今日青年学者の眷々服膺すべきものを合蓄することを感じ。一にも二にも泰西の亞流を以て甘んずる洋学者には胸に三尺の秋水を擬せらるゝ趣があるであろう。」

これによつて見ても、藤浪さんの學者の態度がわかると思う。歐羅巴盲洋時代而も、自ら歐洲に留学までして來た藤浪さんに、この心意気があつたのは、即ち医史学研鑽の賜に外ならないのである。

東京名墓顕彰会

私も一度、名墓顕彰会の機關誌である「掃苔」に何か書けと云う手紙を藤浪さんから受取つたことがある。

ところが、當時私は、名墓顕彰会のことも知らず、「掃苔」の目的とするところも知らなかつたので、何でもこれは考古学的な雑誌のことであろうと思ひ、墓と云うものが何うして立てられるようになったか、靈魂の信仰の起源は何であるかと云うようなことを、考古学的な立場から書いて送つたが、それは遂に没になつたことを覚えている。

今から思うとそれは当然なことで、甚だすまないこととしたと思う。實際、人が死ぬと必ず何等かの墓様が建てられるのであるが、その家の没落した時のときは勿論のこと、そうでなくとも、年代を経ると顧みるものがなくなつたり「先祖代々の墓」として合祀されたりして湮滅してしまうことが多い。そういう場合、何等の功績を遺さなかつた人なら致方もないが、立派な仕事をしたり、立派な徳を立てたりした人の多くは、墓の湮滅と共に忘れられてしまうことが多いのは悲しいことである。

*7 君が主張する所も亦た活物窮理なり
軒岐を尚ぶも未だ必ずしも
其の書を盡く信ぜず
蛮貊を悪むも未だ必ずしも共衛を盡く排さず
博く諸を五大洲の中に採り
日に試み月に驗し一次活人に帰す
即ち是れ神州の医道のみ

自分が主張するところも（華岡青洲が説く）活物窮理である古典医学を尊重するが、その書物をすべて信じるわけではない。南蛮夷狄の医学を嫌うが、すべて排除するわけではない。広く世界中に知識を求め。日々試験し月々検証を重ね、人を生かすことに帰着する。これこそが我が国の医道である。

*8 本間玄調（1804-72）。本間廉軒。玄調は通称。華岡青洲に学んだ蘭方医、外科医。水戸徳川の侍医となった。青洲の麻酔法を実践、発展させ多くの手術を成功させた。その症例を記録した「瘍科秘録」「続瘍科秘録」で、青洲が門外不出とした麻酔法、「通仙散」の成分を公開して破門された。

まことの人の、藤浪さん及び藤浪夫人が、この事業に心からの共鳴を感じられ、そのため多くの忙しい時と貴重なる金とをさげられたのは医家先哲肖像集を編まれた心と同じである。

名墓顕彰会の機関誌であるからでもあろうが「掃苔」の「藤浪剛一博士追悼録」号には実に、数多くの藤浪さんの掃苔事蹟が記されて居る。そのうちの一を拾つて見ても、藤浪さんは、富士川博士や津崎博士の如き名士と共に長谷の一向寺に田代三喜の墓を訪ねている。小幡景憲や佐藤信淵、鈴木春山の墓も訪ねている。曲直瀬玄朔の墓を訪ねている。こうした掃苔行をされたことは恐らく前後三四十回を越ゆるであろう。而もその間に、これ等の先哲についての講演も屢々行っている。

勿論これは藤浪さん一人のためでなく、雑誌「掃苔」や講演会の諸名士の講演によるのであるが、兎に角、こうしたことのため、今まで人の知らなかつた先哲人が再び人の意識に上り注意を引いたのは數かぎりなくあるであろう。このことだけでも私は、藤浪さんは偉大な善い仕事をしたと思う。

温泉と藤浪博士

藤浪さんと温泉との関係は深い。

昭和五年創立の日本温泉協会の理事たり。

昭和十年創立の日本温泉気候学会の理事たり。

昭和十六年創立の日本温泉科学々会の副会長たり。

著書としても

「温泉知識」

「温泉療法」

「東西沐浴史話」

等がある。

日本が古くから有名な温泉国でありながら、科学的研究が行われたのは蘭医学が輸入されてからであるが、しかし蘭医学時代のそれは、概ね幼稚であると云つてよい。

明治時代になって漸次その発達を見たが、中にも明治十三年に出た桑田知明氏の「日本温泉考」やベルツ氏の「日本鉱泉論」等が、温泉知識を高めたのは事実である。その後、温泉の学的研究は明治の中葉に至つて挫折した觀があるが、明治四十五年に内務省が出た日本鉱泉分析表に至つてはじめて、日本温泉の成分が明らかにされた。そしてそれは更に進んで大正年間、鉱泉に含まるエマネチオンの測定が行われるに至つて、温泉が一般の注目を惹くに至つた。

物理療法を専門とする藤浪さんが、温泉の研究に着目したのは寧ろ当然なことであったかも知れない。私たちはしかし、藤浪さんの温泉学は、従来の温泉学に一つの新しい方向を示したことを見失してはならない。

試みに藤浪さんの著温泉知識一巻をとって見ても、その内容の如何に豊富なるかに驚くであろう。中にも此書は、實に泉質の分析や治療のことにのみ終始せず、世界一の温泉国である日本で温泉療法を重視する外人浴客を吸収することも不可能でないと云う見地から温泉場の設備や風紀のことまで及んで、温泉の改善をはかったときは、温泉学に一新軌軸を開いたものと云うべきである。

而もこれはたゞ書物の上の研究には止まらず、何事にも精根をさげ尽さずんば止まない藤浪さんのことゝて、このためには常に温泉地を巡って観察し、研究し、その改善のために如何にすべきかを考察するを怠らなかつた。斯くの如き努力を経て成ったのが「温泉知識」であるが、此書の序文に於て藤浪さんは云つてはいる。

「江戸中期の医家原芸庵は嘗て城崎温泉に浴して

囊膿不瘳將十春 温泉來浴有奇勲

平素自負刀圭術 今日何圖被医君^{*9}

と吟じた。ゲーテは浴泉の魅力に憧れて各地を巡遊し、傍ら興を泉水の分析に寄せて、力をその事に尽した。ゲーテが不可解と称せし泉水は、今日猶をその不可解なるものを掴むことが出来ない。自然の現象は偉大であり、又精微である。それを社会政策上からするも、温泉の利用には多大なる考慮を払うべきであり、これを医学上の立場よりするも、十分の効果を全うせしむべきことは、温泉を持つ國の當然研覈せざるべからざる吃緊の問題である。既に西洋の温泉国に於ては、定まった國法が行われて、國民の福祉のために盛んに利用厚生の途が講ぜられつゝある。我が國が温泉を持つ國としては世界一でありながら、その國策に就いては何等見るべきものもなく、普く國民に温泉の恵澤が共えられていない。今日、國民の保健が強く叫ばれて居るとき、温泉を持つ我が日本は宜しく茲に顧みねばならぬ。即ち温泉知識を新たにし、一切の旧弊を一洗し、温泉開発の陣容を改めて、西洋の温泉国と轡を駆けて馳騁すべきである。即ち確乎たる温泉國策を樹立し、泉数の汎用を大にすべき機会に臨んでいるのである。此際、余が抱ける平生の素志を大方の諸君に告げ、泉数のよつて現る所以を説くも、亦た必ずしも贅冗の言たらざるを信ずる……」

*9 襄に癪瘳ること將に十春なり
温泉來りて浴して奇勲有り
平素自ら刀圭の術を負うも
今日何圖被医君に被るを

十年も治らなかつた病であるが
温泉にはいると奇跡的に治つた
普段は自分が医術に長けていると自負していたが
今日は思いがけず(温泉という)医師に治療された

これが即ち藤浪さんの此書を著した抱負である。もって藤浪さんは決して書齋のみの学者ではなく、その研究はまた、これを社会国家に役立てようとする実際的な希望のもとになされたことを知るべきであろう。これは實に藤浪さんの携わった凡ゆる方面の研究に及んでいる態度であって、さきに述べた医史学にしても、名墓顕彰のことについても、凡てはみなこの念願より出発したのである。

慶應大学の病院の仕事として温泉治療室を設けたのも此の目的によるものである。

結語

藤浪さんについて書くことはこれで終ろうと思う。その事業について、人となりについて書くべきことはまだ沢山ある。けれど、つらつら惟んみるにどの思い出に私のみがあまりながく書くことは、ほかの人にすまないことであるし、第一、私が長々書けば書くほど藤浪さんの遺徳を顕彰するどころか、かえって、その人格をけがす恐れがあるからである。

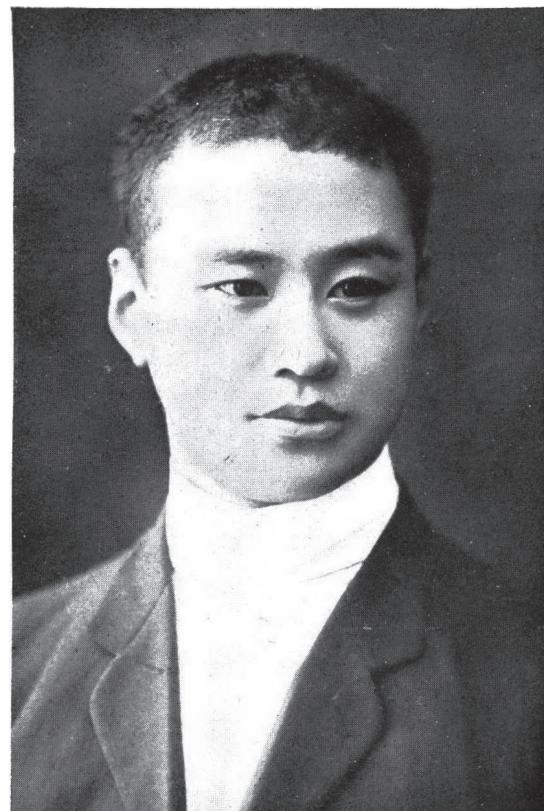
筆を擱くに当り、私の感ずることとは、私はこれを書くことによって、生前の藤浪さんにより、より多くの善き感化を受けたことである。この事だけによっても、私は心からの感謝をさゝぐべきである。

願わくは藤浪さんの靈よ。私のこの不完全なふつゝかな献げものゝ余りにもお粗末なのを赦され度い。

* 旧字旧かな使いは新字新かな使いとした。



岡山医専時代



明治 40 年頃



明治 44 年 ウィーンにて